

中心と周縁から見るマレー人性

—シンポジウム「マレー人性を考える」—

西 芳実

2004年6月19-21日に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で開催された国際シンポジウム“Thinking Malayness”(マレー人性を考える)は、報告者の国際性、取り上げられた題材の幅広さ、アプローチの多様性といった点で、マレー人性をテーマにした研究会としては近年見た中でも特に充実した内容であった。3日間に8セッション(1.マレー世界とは、2.マレー人アイデンティティ:その連続性と変容、3.歴史的観点から見たマレー人概念、4.マイノリティと国民国家、5.岐路に位置するマレー人性、6.争いの場における民族意識と土着主義、7.文化の生産と実践の場における表象としてのマレー人性、8.イスラムとマレー人性との関係に関する考察)で行われた報告は25にのぼった。参加者はここで個別の事例についての理解を深めると同時に、現代世界におけるマレー人性の現れ方に寄せられる関心として大きく2つのものがあることをあらためて確認することができたのではないと思われる。

第一は、スワン・バジラチャヤ「スリランカにおけるマレー人の民族意識」、スリアニ・スラットマン「問題視されるシンガポール・マレー人」、ファウジ・スキミ「マレーシアにおけるマレー人とマレー性の再考:境界に位置するマドゥラ人」、床呂郁哉「フィリピンにおけるマレー性」、高村加珠恵「マレー世界に住むこと:タイ=マレーシア国境に

おける中国系学校における実践」、サロジョ・ドライラジョ「タイにおいてマレー人であることの苦悩」、西井涼子「南タイにおける性道徳と宗教的言説」のように、当該社会において周縁的な地位にある人びとに関わるマレー人性への関心である。これらの人びとは、多くの場合「マレー世界」そのものにおいても辺境にある。

第二は、富沢寿勇「現代のDunia Melayu運動におけるマレー性の新旧両側面」ならびにナタリー・フォー「マラッカ海峡を越える同族意識の復活」のように、マレー世界のいわば中心に位置すると目される人びとあるいは地域から、既存の国家の範囲を越えた広がりを持つマレー人性を構想する動きが生まれていることへの関心である。

担い手となる人びとがどのような社会を生活の場としているか、また、その社会においてどのような位置に置かれているかに応じて、そこに表されるマレー人性の広がりや意味づけは異なる。各報告は、マレー人性に共通する特徴をあえて見出そうとしないことで、場や担い手に応じて多様な形態を見せるマレー人性をあるがままに描き出すことに成功していた。

そのように見るならば、レオナルド・アンダヤ「マレー的關係の再考:支配者と親族集団」ならびに西尾寛治「港市国家におけるマレー人概念:18世紀のジョホール=リアウ王国の事例」から

構成された第三セッションは、本シンポジウム全体にとっての基調報告と位置づけることができる。前近代におけるマレー人概念としてのムラユの成立とその意義をテーマとした両報告は、ムラユという集団性の成立を検討するうえで、いずれも欠くことのできない重要な視角を提示していた。

アンダヤも西尾も、前近代世界におけるムラユ世界の周縁性を踏まえた上で、そこに現れたムラユの有していた意味についてそれぞれ異なる議論を展開した。

アンダヤは、ムラユ概念がジャワとの対抗概念として発展した点を重視する。ここでムラユ概念は、優勢だったジャワ世界と対抗するために自らとジャワとの間に一線を画すための概念であり、身内とよそものを区別するための概念である。したがって、ムラユ諸国家が発展するためには、いかにしてジャワを除く多様な人びとを「身内」としてとりこむかという点が重要になる。ここでムラユ概念は、多様な人びとを取り込む包括的な側面に関心が寄せられている。ただし、ムラユに取り込まれなかった人びとや、ムラユが対抗する相手との関係はどのようになるかという問題は残されている。

他方、西尾は、アンダヤのこうした議論を踏まえたうえで、ムラユによる周縁性を克服する試みを、強者に対抗せざるを得なかったという側面からではなく、自らの周縁性を補うために他者と協力関係を結ぼうとしたという側面から見た。

自らの領域内で食糧を自給することができず、人的資源にも限界があったムラユ諸国家にとっ

ては、外来者を招き入れ、交易を発展させることが重要であり、ジョホール=リアウの場合は、航海術や商業に長けたプギスを取り込むことが必須であった。このとき施政者は、プギスを文化的にはムラユの一員に取り込んだうえで、国王はムラユから出し、副王はプギスから出すという区別を行い、政治的にはムラユとプギスを区別し、これにより、経済的な繁栄と政治的な統合を実現しようとした。ここでプギス性とムラユ性の区別は、互いに排他的な関係の反映ではなく、港市国家という場において協力関係を維持するためのすみわけの技術のあらわれである。

周縁性を乗り越えるために、ムラユ概念は、他者を内側に取り込むものとして(アンダヤ)、あるいは、自他の違いを維持しながら他者と共存する場を設定するものとして(西尾)構想されたとする両報告は、前近代の事例を扱いながら、現代におけるマレー人性を考察する上でも有効性を失っていない。その意味で、本シンポジウムは多くの示唆に富んだ有意義なものであった。